

オールド・レンズによる表現

Expression by the old lenses

市川 治郎
ICHIKAWA Jiro

キーワード：オールド・レンズ、表現
Keywords：The old lenses, Expression

The year 2020 will be remembered as a year in which the values that we humans have built up in various forms have fluctuated in the unpredictable new coronavirus in the world. I'm afraid whether should I keep on working artistic activities even under this emergency. It's because I think artistic activities should have the purpose to create artistic value, rather than countering the emergency. Harvard Reid was writing "Education by art" even under bombing of London by Nazi Germany. Encouraged by that spirit, I dared to work on the work that could not contribute to improve the current situation. I would like to ask myself whether art that is powerless to the real world can become even more meaningless.

1. はじめに

2020年、全世界が想定外の新型コロナウイルス禍の中で、私たち人間がこれまでさまざまな形で築き上げてきた価値観が揺らいだ年として記憶されるであろう。

このような非常事態下において、美的価値の創造を本来の目的とするような芸術活動を行うことが、果たして人間として適切な行為なのかどうかという悩みはある。

しかし、ナチスドイツによるロンドン爆撃下に「芸術による教育」を執筆していたという、尊敬するハーバード・リードの強靱な精神に想いを寄せ、あえて現況の改善に全く寄与し得ない作品制作に取り組んだ。

もとより現実社会に対して無力な芸術が、さらに無意味な存在となり得るのかどうか、自らに問いかけてみたい。

2. 表現の意図

光学レンズの特徴として、球面収差、コマ収差、非点収差、像面湾曲、歪曲収差、色収差などを適切に補正して、精度の高い画像を得られるような設計が施されている。

現代の最新式光学レンズは、高精細な描写ということでは極めて高性能であり、過去に製造された古いレンズと描写性能などを比較すれば、まず間違いなく新しいレンズの方が優れている。つまり、よりシャープな写真を撮影したいのであれば新しいレンズを使うべきであろう。

「オールド・レンズ」についての特段の定義はないが、今回使用したレンズは、最も古いものは84年前の製造であり、新しいものでも30年前に製造されたものである。

今回の表現では、それぞれのレンズの性能を比較しようとした訳ではない。また意図的に絵画風の作品にしようとして収差の大きいレンズを使用した訳でもない。

あくまでも、古いレンズによる表現の実際を作品に反映させるため、過去の光学レンズを使用したものである。

3. 撮影機材の説明



1 Nikkor S・C 5cm F1.4 1960年 (左上)



2 Elmar 50mm F3.5 1949年 (右上)



3 Nikkor H・C 5cm F2 1954年 (左上)



4 New Nikkor 50mm F2 1976年 (右上)



5 Ai AF Nikkor 50mm F1.8S<New> 1990年 (左上)



6 W-Nikkor・C 3.5cm F3.5 1950年 (右上)



7 Summaron 35mm F3.5 1949年 (左上)



8 Elmar 35mm F3.5 1936年 (右上)



9 EL-Nikkor 75mm F4 1972年 (左上)
10 Nikkor Q・C 13.5cm F3.5 1950年 (右上)



11 Leica TL 2016年 (ミラーレス一眼デジタルカメラ)

4. 作品と解説



12 Nikkor S・C 5cm F1.4 1960年 (F1.4開放)



13 Elmar 50mm F3.5 1949年 (F3.5開放)



14 Nikkor H・C 5cm F2 1954年 (F2開放)



15 New Nikkor 50mm F2 1974年 (F2開放)



16 Ai AF Nikkor 50mm F1.8S New 1990年 (F1.8開放)

ほぼ同一条件のモチーフを、絞りを開放値で撮影した写真作品である。使用したレンズは35ミリフィルムカメラ用であり、APS-Cサイズのデジタルカメラ本体に取り付けて撮影したため、それぞれの焦点距離は35ミリ判に換算すると50ミリ→76ミリ、35ミリ→53ミリ、75ミリ→114ミリ、135ミリ→206ミリ相当になる。

開放ではピントの合う範囲がとても狭く、全体に柔らかな表現となっている。色補正などは行っていないため、古いレンズほど渋い色合いになった。



17 W-Nikkor・C 3.5cm F3.5 1950年 (F3.5 開放)



20 EL-Nikkor 75mm F4 1972年 (F4 開放)



18 Summaron 35mm F3.5 1949年 (F3.5 開放)



21 Nikkor Q・C 13.5cm F3.5 1950年 (F3.5 開放)



19 Elmar 35mm F3.5 1936年 (F3.5 開放)

84年も昔のレンズにこれだけの描写力が備わっていることに驚かされる。1950年頃になると、すでに我が国のレンズ製造技術が、光学技術先進国であったドイツに並んでいるようにも感じられた。

75ミリのレンズは、写真撮影用ではなく引き伸ばし専用のレンズである。レンズ交換式のミラーレス一眼デジタルカメラには、さまざまなレンズがアダプターを介して取り付けられるようになり、かつては難しかったレンズの流用が簡単になった。シャープネスの限界を極めるという高性能の追求からは程遠い世界ではあるが、表現の多様性の実現という観点からは望ましい展開といえよう。

レンズの開放値で撮影した作品は、室内にも関わらず、いずれにも全体に白っぽくフレアがかかり、少し寝ぼけたようなゆるさの感じられる表現になった。

かつて、大正時代から昭和初期にかけて、「ベス単フード外し」などと言われ、わざと滲むようなボケ加減を生かして流行した「ソフトフォーカスレンズ」の絵画的芸術写真効果にも通じるような不思議な雰囲気を感じられる。



22 Nikkor S・C 5cm F1.4 1960年 (F8)



25 New Nikkor 50mm F2 1974年 (F8)



23 Elmar 50mm F3.5 1949年 (F8)



26 Ai AF Nikkor 50mm F1.8S New 1990年 (F8)



24 Nikkor H・C 5cm F2 1954年 (F8)

一般的に、光学レンズのもつ性能が最もバランスよく発揮されると言われる、絞り値 F8 で撮影した作品である。

ピントの合う範囲が広いので、全体にシャープな雰囲気であるが、ここまで絞ってもまだフレアが消えないのがオールド・レンズらしさと言えるのかもしれない。

しかし拡大して見ると、細かな文字を読み取ることができ、いわゆる解像度という面ではかなり高い性能を持っていることが分かる。

5. まとめ

「オールド・レンズ」には不思議な味わいがあるということから、現在でも古いレンズの需要は高いと言われる。「味わい」というのは極めて感覚的な言葉であり受け止める人の感性によって左右されやすい不確実なものである。

冒頭にも述べたように、過去のレンズはコンピュータで極限まで精密に計算された現代のレンズに到底かなわない。むしろ「オールド・レンズ」に求められるのは、シャープネスに逆行して何が写っているのか判断しづらい程ソフトな写真や、目に見えない雰囲気のようなものが写っている写真なのではないだろうか。そのように考えると、まだこれからも「オールド・レンズ」による表現には芸術的な価値が見出せそうである。